

宮城県
 せんだいしりつ
 仙台市立
 いずみしょうりょうしょうがっこう
 泉松陵小学校

けやき山 世界へ向けて

学校紹介

仙台市立泉松陵小学校は、松陵小学校と松陵西小学校が統合し、平成25年4月に仙台市の126番目の小学校として開校しました。全校児童数は365名です。学校の北西には泉ヶ岳、西に蔵王の山並みを望み、東は県民の森と接した自然環境に恵まれた地域に学校はあります。

たてわり活動など学年の枠を超えた交流が多いことや学校と地域のつながりが強いことが、泉松陵小学校の魅力です。「笑顔・チャレンジ・思いやり」を合い言葉に、みんな明るく元気に生活しています。

活動場所

学校林「けやき山」は、以前は草木が生い茂り立ち入ることができない山でした。しかし、「この山を子供たちの学習で活用していきたい。」という強い思いから、9年前に当時の校長先生が独力で草木を切り拓き、散策路を作り始めました。6年前からは、仙台市100年の杜推進課と提携して、総合的な学習の時間の中で、木を伐採したり植林をしたりと森を守るための活動が始まりました。一昨年からは、宮城県森林インストラクターの方々にご協力いただき、遊歩道の整備や展望台作りなどに取り組みました。今では、全学年誰もが楽しめる場になっています。今年は、昨年度から引き継いだ井戸掘りに挑戦しているところです。



サミットに参加してみて…

今後の夢・希望・活動計画

サミットではいろいろな学校の発表を聞き、学校林には幅広い可能性があることを感じました。特に、地域を活性化するために学校林を活用していたり、防災林としての視点で学校林の活用を考えていることに興味を持ちました。私たちの学校は地域とのつながりが強いので、その良さを生かし、けやき山を地域のために活用することも考えていきたいと思いました。今後は、多くの方の支えを得ながら、けやき山の良さを地域の方々に知ってもらえるような取組を進めていきたいと思っています。



けやき山 世界へ向けて

「みんなのけやき山」活動紹介

仙台市立泉松陵小学校
6年 郡山 由大
6年 山本 花鈴



けやき山でとれた
ミヤマクワガタ



インストラクターの方々と遊歩道を作る

私たちの仙台市立泉松陵小学校は、今年平成25年4月に、それまでの松陵小学校と松陵西小学校が統合されて、仙台市の126番目の小学校として新しくスタートしました。

けやき山は、校庭の南側にあつて、校庭から頂上まで高さ28m、面積約3000㎡の山です。以前はただの山で、草木がぼうぼうと生え、子どもが登ったりすることはできませんでしたが、9年前から、総合的な学習の時間の環境学習の中で、木を伐採したり下草を刈ったりして登る道を作るなど、少しずつ子どもたちが遊ぶことができるようになってきました。特に一昨年度からは、宮城県森林インストラクターの方々に入っただき、5年生が環境学習の一環として継続的に取り組むようになり、さらに様々な活動を行うことができるようになりました。今では、いろいろな実が成り、鳥も遊びに来ます。3本の道があり、虫をとったりアスレチックで遊んだり、おいかっこをしたりと、全学年の遊びや発見の場になっています。私たちが作った展望台から見る松陵の街はとてもきれいです。

昨年度、私たちは、けやき山での活動を始める中で、それぞれのテーマを以下のように設定し、グループ別に活動を行いました。また、全体や各々の活動で以下のことを実施してきました。

【テーマ】

- ・けやき山の季節の特ちょうと他の山の季節の特ちょう
- ・ケヤキ山の生き物
- ・けやき山と学校
- ・森と動物の関係
- ・意外な森の役割
- ・季節によって変わる、けやき山のすがた
- ・おいしいケヤキ山
- ・自然災害を防ぐためには
- ・木の役割
- ・山と人とのかわり
- ・アスレチック
- ・森と生活との関係
- ・虫と自然の関係

【実施したことがら】

- ・山に登る遊歩道を新たに一本整備した。
- ・展望台を作った。
- ・バードケーキなどを置いて、野鳥が来るようにした。
- ・バードボードを作り、けやき山に来る野鳥を紹介した。
- ・実のなる木の苗を植えた。
- ・「綱登り」などのアスレチックを作った。
- ・ベンチを作った。
- ・井戸を掘り始めた。
- ・統合する2つの小学校の校木を植樹した。



やぐらを組み、井戸を掘り始める

いろいろな活動とおして「森の大切さ」「木の生き方」「木の大切さ」「自然の偉大さ」がよく分かりました。学習だけでなく、遊ぶ中でもいろいろな発見があるけやき山は、わたしたちにとっては大切な山です。このような学校の森が、こんなにも身近にあることはとても幸せなことだと思いました。今年の5年生も、わたしたちの活動を受け継いで、下級生にとって、さらに楽しく豊かな「けやき山」を作ろうとがんばっています。これからも、けやき山を大切に、見守っていききたいと思います。

仙台市立泉松陵小学校



1 実践の成果

実践の効果や子どもの成長、今後の期待など

- 実際に森に入り、木々や様々な生き物に触れることによって、自然への関心が急に深まった。「今まで何となく山を見ていたけど、葉っぱや木、枝などをじっくり見るようになった。」などの意見が多く見られた。
- 山や森が果たしている様々な役割・機能などを知り、自然を守っていく・増やしていくなどの意識を持つようになった。
- 地域の方や森林インストラクターと共に植樹や歩道作りを行うことで、地域の環境作りに役立っているという気持ちや、学校の山をよりよいものになっているという達成感を味わうことができた。

2 実践の課題

苦労したことや困ったことなど



- 専門的な知識や技能が必要になることが多いため、どうしても森林インストラクターの方に進め方を願うことが多くなってしまった。危険なことは別として、子どもたちなりに活動の内容を考えていく流れを作っていく必要がある。
- 限られた時間の中でしか活動できないため、十分な活動時間や振り返りの時間が取れない。また、時期も冬期間に集中してしまった。

3 課題への対応

工夫したことや課題の解決策など

- 子どもたちの学習の様子や記録をしっかり残し、次学年の実践につながるようにしている。
- 自発的に山を観察するよう声がけしている。また、図工の材料集めや理科の観察で山が利用できるときは、できるだけ活用するようにした。

4 その他

今後の計画や方向、抱負や希望など



- みんなが楽しめる山、活用できる山作りを進めていきたい。他の学年の児童と一緒に学習を進められるプランを作り、山の植物や生き物が全校児童にとって身近なものになっていくことが理想である。
- 東日本大震災を受けて、山と防災の関連性について考えていきたい。たとえば現在進められている井戸作りや、非常時の燃料になる木材等、災害時に役立つものなどを探していきたい。



福井県

あわらし
波松小学校

〔5年〕久保満里奈／山下珠緒

松の苗を育てて緑を守ろう



学校紹介

波松小学校は、福井県の最北端のあわらし市にあり、北陸有数の温泉“あわら温泉”街から車でおよそ10分、野菜や果樹の栽培がさかんな北部丘陵の波松地区にあります。波松地区は日本海に接しており、マツ林がせまる浜で行われる春と秋のマラソン大会をはじめ地引き網体験、海岸清掃活動は欠かせない学校行事です。完全複式校で児童数は少ないが、北潟湖で毎年行われるカヌーポロ大会で上位入賞を続けるなど、大きな学校に負けないがんばりがあります。

活動場所

北潟の森(北潟国有林)は、越前海岸国立公園内・石川県境に近い福井県にあり、潮害防備保安林となっている。北前船寄港地の三国湊から吉崎御坊・加賀方面へと至る「浜街道」、植生にあわせ名づけられた「マツの道」「ツバキ回廊」などの遊歩道が整備されている。遊歩道を歩きながら、植物・木の実、鳥などの生き物とともに潮さいから、森と海の2つの季節の移ろいを味わうことができます。歴史と自然に加えて、風力発電の大きく白い風車が北潟の森とあわせた新しい景観となってきた。



サミットに参加してみよう

今後の夢・希望・活動計画

これまで同様、クロマツの苗木を育て北潟国有林へ植樹する活動「森づくりプロジェクト」に協力していきたい。また、波松小学校の子ども達にとってより身近な「海」や「川」そして「里山」にふれる活動にも参加していきたい。特に今年から校区内にある民有地(現在は荒れ果てた山漠となっている野山)を利用した「マイ里山づくり」(あわらの自然を愛する会主催)に参加し、波松地区をとりまく自然について学習していきたい。

活動テーマ

松の苗を育てて緑を守ろう



福井県あわら市波松小学校 5年 久保満里奈 5年 山下珠緒

○活動の様子Ⅰ「クロマツの種について学習」



○活動の様子Ⅱ「国有林で松ぼっくりを採取」



○活動の様子Ⅲ「学校園に松の種子を植える」



○活動の様子Ⅳ「クロマツの発芽の観察」
「クロマツ2年ものの移植」



○(これからの活動)

マツの苗の観察・世話を続け、数年後に国有林に移植できるようにする。

あわら市波松小学校



1 実践の成果

実践の効果や子どもの成長、今後の期待など

①クロマツの種子を学校園で育てる活動を通して、樹木(クロマツ)に対する興味関心が深まったように思われる。また、北潟国有林についての学習活動や体験活動により、身近な植物

(花)や虫(昆虫)などへの関心が高まっており、高学年が低学年に、植物(花)や虫(昆虫)の名前を教えるだけでなく、その植物の育て方や成長の様子を話している姿も見られてきた。

2 実践の課題

苦労したことや困ったことなど

①複式学級であるため、学習活動、体験活動をどの学年で行うかの検討が必要であった。
②また、「みどりの少年団」活動に取り組んでいるほか、学校園での栽培活動、校区内での「花いっぱい運動」「清掃ボランティア活動」など多くの体験活動に取り組んできた。学年ごとの人数も少なく、計画を始

めた段階では単学年であったものが、学年範囲が広がっていき、全校での活動となっていくことになり、時間的な問題も出てきている。
③北潟国有林は校下の外にあり、児童にとって身近なものではない。
④北潟国有林に出かけるには時間や費用がかかる。
⑤教員の中に、専門性を持ったものがない。

3 課題への対応

工夫したことや課題の解決策など

①② 学年を広げれば、同じことに2年以上取り組むことになり児童の意識の低下が懸念されたが、繰り返し学習することによって定着が進み活動内容と活動意識ともにレベルアップされることを期待して、学年幅を拡大して取り組むことにしている。指導時間については、指導内容の精選化や統

合を考慮して対応している。
③④⑤ 北潟国有林における活動は、専門性を備えたフォレストサポーター、自然保護活動会員、森林管理署職員の方の指導を受けて行うこととし、学校における活動は、通常の教科活動、総合的な学習の時間、学校園での栽培活動を行うこととした。

4 その他

今後の計画や方向、抱負や希望など

①「あわらの自然を守る会」が中心になって計画している「北潟国有林の松を種から育てまた国有林に植樹する」活動を継続して行く。年に数回の「森づくり教室」の講義とともに「松かさ拾い」「松の植え」「幼木の成長記録と保護」「北潟国有林への植樹」までの3年余りの長期にわたる活

動を継続していく。
②国有林内に残る「浜街道」と呼ばれる古道の整備にあわせた学習活動の展開を考える。
③地元の波松地区の生き物調査会などを通して、身近な動植物についての興味関心を深めていく活動を推進していく。



東京都
たましりつ
多摩市立
とよがおかしょうがっこう
豊ヶ丘小学校

〔5年〕瀬角心之介／ジョンソン恵里加

豊小 学校林プロジェクト ～はじめの一歩～



学校紹介

本校は、平成23年に開校した統合新校で、12学級の学校です。特色ある教育活動として、持続発展教育(ESD)と健康教育に取り組んでおり、ユネスコスクールに登録しています。学校林、食育、地域からのESDをスタートして3年目、生活科や総合的な学習の時間で本校ならではの展開を模索しESDカレンダーの改善に努めています。約7100㎡の面積がある学校林を全学年が授業に活用しています。

活動場所

校庭西側のフェンスを開くと学校林アスレチックゾーンの斜面が広がります。大きな桜の木のブランコに乗ると「アルプスの少女ハイジ」になった気持ちになります。続く雑木林ゾーンはコナラが多く、季節ごとに様々な植物の観察ができます。散策路を進むと多様種ゾーンに出ます。ギンナンを拾ったりシイタケを収穫したりする楽しみがあります。斜面の階段を上るとプールの脇に出ます。近年、松枯れや台風による倒木が相次ぎ、健全な学校林を保つ難しさを感じています。



サミットに参加してみて・・・

今後の夢・希望・活動計画

子どもサミット参加をきっかけに、学校間交流が始まったことは大きな成果です。台風被害の驚きに加え、他校と学校林の様子や活動を紹介し合ったことから、プロジェクトで取組んでみたいことが具体化しました。改めて自分たちの学校林の歴史や現状を調べたり、自分たちにできそうな整備活動を実行したりなど、学習が一層探究的に展開してきました。分からないことは専門家に質問して助言を得ながら、学校林の「今」を見つめ「未来」を考えていきます。

東京都 多摩市立豊ヶ丘小学校

(1) 活動のテーマ (題名)
「豊小 学校林プロジェクト ～はじめての一步～」

(2) 学校名
東京都多摩市立豊ヶ丘小学校

(3) 発表者 (学年、氏名)
第5学年 瀬角心之介、ジョンソン恵里加

(4) 学校の紹介
私たちの学校は東京のベッドタウンの1つ、多摩ニュータウンにあります。3年前に北豊ヶ丘小学校と北貝取小学校が統合して豊ヶ丘小学校という新しい学校になりました。東京でもめずらしい広い校庭とその校庭から続く広い学校林があります。朝から外に出て元気に遊ぶ児童が多いのが自慢の学校です。全校児童数は282名、「実行する子・思いやりのある子・健康な子」を目標に緑豊かな環境のもと、明るく元気に生活しています。

(5) 活動フィールドの様子
本校の学校林は、多摩ニュータウンの大規模な開発時にも手つかずのまま残されたとても貴重な樹木林です。学校林としては、都内最大の約7100㎡の広さがあります。学校になる前は、近くの吉祥院というお寺の土地で、お寺で使う薪をとるための林だったそうです。小学校の校地となって30数年。学校林は、遊びの場、学びの場として私たちの身近にあり続けてきました。
学校林は、アスレチックゾーン・多様種ゾーン・雑木林ゾーンの3つのゾーンから成り、キンラン・ギンラン・タマノカンアオイなどの稀少な植物を観察することができます。

(6) 活動の内容や様子

・動植物の観察、自然林探検	・自然林委員会の活動
・ネイチャーツアー	・自然科学クラブの活動
・絵本の読み聞かせ、音読発表会	・造形遊び
・シイタケ栽培	・アスレチック遊具遊び
・豊ヶ丘の自然学校 (ビパーク)	・自然林マラソン
・整備作業	

生活科・理科・総合的な学習の時間をはじめ、いろいろな教科等で活用しています。休み時間には子どもたちが自由に入り、昆虫や植物を探したり、ブランコや吊り橋などのアスレチック遊具で遊んだりしています。特に今年は、全校児童でできる学校林遊びを私たち5年生が企画したり、6年生が学校林の整備をしたりするなど、どの学年も学校林に親しみながら活動を行っています。

(7) 学校教育と活動の関連

私たちにとって、学校林は学校に入学したときから親しんできた場所です。5年生になり、学校林に改めて注目し、出会い直しができたことで、学校林への興味・関心が広がるとともに、その素晴らしさや価値に気付くことができました。きっかけの一つは、樹木医の先生から学校林のスライドを見せていただき、お話をうかがったことです。学級の道徳の授業で自然の大切さについて考えたこともつながっていると思います。私たちは学校林を自分たちが自由に活動を創造し、広げられる新たなフィールドとして再認識することができました。いろいろな学年がいろいろな遊びや学習で親しんでいる学校林で、豊ヶ丘小学校らしい活動をさらに広げていきたいです。



多摩市立豊ヶ丘小学校



1 実践の成果

実践の効果や子どもの成長、今後の期待など

① 学校林との出会い直し

校内にあり、いつでも親しめる学校林。どの子どもも夢中になって遊んだり散策したりしてきた、本校にとっても地域にとっても自慢の学校林である。本年度開校3年目を迎えた本校は、喫緊の課題として「学校林活用・再生プロジェクト」の立ち上げを教育課程に位置付けた。本校で学ぶ6年間、学校林で自然に親しみ多様な活動をするなかで、学校林の現状について子供なりの課題意識をもってほしい、気付いた問題を解決しようと多くの人に学びよく考え実行する子を育てたいと願ってのことである。

今回発表させていただく第5学年は、「多くの子供達が楽しめる学校林での活動」を計画することを「学校林との出会い直し」として、アプローチを開始することとした。

② 児童の変容

- ・自分のやりたいことを実現させるために粘り強くやり遂げようとする児童が増えた。
- ・同じ目的意識をもった児童が集まり、協同的に活動する姿が見られた。
- ・取組み以前よりも学校林を身近に感じられるようになった。「何度でも足を運びたい場所」・「雨の日に傘をさしてでも行きたい場所」・「魅力的な場所」になった。

③ 今後の期待

活動の展開にあたって、自分たちの計画が失敗したり、困難な問題にぶつかったりしても、問題解決に向けて試行錯誤し協働的・探究的に学ぶことをとおして、学校林の価値を実感するとともに、さらに学校林の活用や保全のために、今自分たちができることを考え実行する姿を期待している。

2 実践の課題

苦労したことや困ったことなど

① 第5学年の実践上の課題

- ・自分たちが企画した遊び等の活動を全学年の児童に呼び掛けて実施する前に、学年で試行したが、1回の試行では改善しきれず、繰り返し試行・改善・工夫が必要であった。
- ・さまざまな活動で希少植物のあるゾーンへの侵入が心配された。
- ・学校林は場所によって急斜面や崖、歩きにくい地面(根がむき出し・滑りやすい)などがあり、活動する

際は常に安全面の配慮が必要であった。

- ② 学校では、児童が楽しめるようアスレチックなどの遊具を取り付けてきたが、樹木への負担がある。平成23年秋の台風の襲来により、大きな樹木が折れたり倒れたりしたため伐採や、遊具の架け替え等の対応が必要となった。

- ③ 学校配当予算内では、学校林の維持・整備に要する費用を確保できない。

3 課題への対応

工夫したことや課題の解決策など

① 第5学年の活動上の課題への対応

- ・全学年の児童が楽しめる企画(遊び)を練り直し、課題を1つ1つ解決していった。1学期にできなかった活動は2学期に継続して行うことにした。
 - ・活動の際に三角コーンやスズランテープなどで立ち入り禁止ゾーンを明確に示した。
 - ・遊びに参加する学年の発達段階に応じて、安全に活動できる内容かどうか吟味した。
- ② ボランティアによる対応が可能な樹木については、直ちに伐採等を依頼し、児童の安全を確保した。その

後、専門職の見立てを得てPTA積立金による対応、市の補正予算による対応の2段階で伐採を実施した。遊具の架け替えや木に負担をかけない遊具への変更を行った。

- ③ 学校として「豊ヶ丘小学校 学校林活用・再生プロジェクト委員会」を立ち上げ、本校教育連携コーディネーターを調整役として、樹木医や多摩市ボランティア団体やNPOとの連携強化を開始した。保護者や地域協力者のボランティアの募集を継続し、計画的な整備・保全活動を開始した。

4 その他

今後の計画や方向、抱負や希望など

- ① 第5学年の活動については、子どもは学校林での遊びの計画・準備には夢中になって取り組んだ。今後、学校林が直面する課題「活用・保全に向けた取り組み」と出会う場面の展開を検討中である。今回の本サミットへの参加・交流が契機

となることを期待している。

- ② 「子供の育ちを見通したESD」の観点から、学校林にかかわる全学年の活動を価値付け、学校としての指導計画及びESDカレンダーの作成・改善を行う。

愛知県

おかざきしりつ
岡崎市立
おいだいらしょうがっこう
生平小学校

〔6年〕阿部航／伊藤諒太郎／内田結稀／高橋麻李

愛鳥活動を軸にした 里山保全活動



学校紹介

生平小学校は、明治5年に額田県生平郷学校として発足し、今年で創立140周年を迎えました。全校児童は71名で、1年生から6年生までが仲良く遊ぶのどかな学校です。学区には男川の清流、三河山から続く山々があり、たいへん豊かな自然環境に囲まれています。また、人々が代々営んできた里山や水田、祭りが残る土地でもあります。これらの自然環境や残された文化を活用して、全校児童で愛鳥活動を軸にした環境保全活動に取り組んでいます。

活動場所

活動場所は、学校の裏山、裏山遊歩道、蛍流の森の3か所です。

学校の裏山は、昭和53年に児童とPTAにより「小鳥の森」と「緑の教室」として整備されました。校舎の窓から見渡すことができ、野鳥などの観察に適しています。

裏山遊歩道は、平成14年にPTAが主となって、地域の方から山林を借用する形で整備され、ビオトープも作りました。学校の裏山と裏山遊歩道は校地と隣接しています。

蛍流の森は、平成22年に岡崎市が遊歩道として整備し、地域の団体「ロックエンゼル」がその後の管理を行っています。蛍流の森は学校から500m程の距離にあります。



サミットに参加してみても...

今後の夢・希望・活動計画

本校の愛鳥活動を軸にした環境保全活動も32年目を迎え、親子2代で愛鳥活動に取り組む家庭も多くなっています。そこで、愛鳥活動を継続し、親子三代で愛鳥活動に取り組む家庭が出てくるようにし、時間軸におけるつながりを深めたいと考えています。また、河川でつながっている地域との交流をするなど、地理的なつながりを考えた活動も展開したいと考えます。そして、子どもたちに自然との共生感覚を身につけさせると共に、地域住民の環境保全の意識を高め、「環境保全の生平地区」と呼ばれるようにしたいと考えています。



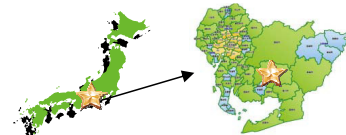
愛鳥活動を軸にした里山保全活動

愛知県岡崎市立生平おいだいら小学校

6年 阿部 航 伊藤 諒太郎 内田 結希 高橋 麻李

○学校紹介

私たちの生平小学校は、徳川家康の生まれ故郷である岡崎市にある、全校児童71名の学校です。学校周辺や学区の自然環境を活用して、昭和53年から学校林での愛鳥活動に取り組んでいます。



○活動場所

昭和53年に学校の裏山を整備して「小鳥の森」と「緑の教室」を作りました。平成15年には、地域の方から山林を借りて「裏山遊歩道」を整備しました。平成22年には、学校の近くの荒れた山林が整備され、「蛍流の森」と名づけられました。蛍流の森の「岩清水」から流れ出る沢ではホタルが舞います。ここでは地域の里山保全団体「ロックエンゼル」と共に活動しています。

☆愛鳥活動

- 野鳥観察 (32年間継続)
- ツバメの営巣調査 (26年間)
- 校内発表会 発信 ピオトープ
- 巣箱の製作・架設 給餌活動

☆里山保全活動

- 間伐 植樹
- 樹木看板の取り付け
- ネイチャービンゴ
- ネイチャーゲーム
- 森の動植物の勉強会



野鳥のために
環境を良くしたい！

○学校教育と活動との関連

- ・ 図工の時間に、間伐した木を使って人形を作りました。
- ・ 図工と家庭科では、間伐した竹で飯ごうを作り、間伐材から作った木炭で火を焚いてご飯を炊きました。
- ・ 国語と社会の森林にかかわりのある授業では、インターネットや図書で森林のはたらきを調べました。
- ・ 算数の授業で、森林の木の太さの平均を出しました。



○今後の活動への思い

- ・ 今後も愛鳥活動を進めて、伝統を守っていききたいです。学校林をもっと大切にして、今よりもっと美しい学校を目指していききたいです。(結希)
- ・ 木を植えて、たくさんの生き物が来るようにしたいです。(諒太郎)
- ・ この自然を子孫へとつなげていききたいです。(航)
- ・ 裏山整備をして、裏山をきれいにしたいです。(麻李)

岡崎市立生平小学校



1 実践の成果

実践の効果や子どもの成長、今後の期待など

- ・「愛鳥活動」が本校の伝統として30年以上にわたって行われており、毎年学級ごとに追究をする「学級の愛鳥」を定めている。本学級の愛鳥は「シジュウカラ」であった。学級の愛鳥を追究する中で森林の重要性に気づいていくという思考の流れであったため、子どもたちの意欲や行動力を維持して学習を進めることができた。また、シジュウカラから森林の重要性を考える際に、その餌である「蛾」についての追究をした。これにより生物多様性にも触れることができた。子どもたちは、すべての生き物が大切であると知り、また森林と生き物のつながりやそれらと人間生活のつながりにも気づくことができた。
- ・様々な体験活動を行う際、愛鳥を意識しながら活動す

ることができた。身近な存在にこだわりながらの活動であり、子どもたちの思考に無理が生じなかったように思う。

- ・間伐などの体験活動を通して、「自分たちの手で」地域の環境を改善することができるということを肌で感じることができた。地域にある「蛍流の森」で間伐体験をした後には、学校の裏山の様子を嘆いた。その後、子どもたちの提案で間伐を行ったり、自然環境のためにできることを考えて進んでごみ拾いを行ったりすることができた。

- ・今後は、これらの活動を通して学んだことを自分の言葉で発信していくことができるようになるとういと思う。

2 実践の課題

苦勞したことや困ったことなど



- ・間伐を行うのに担任だけでは指導しきれない部分が多々あった。また、安全面を気を配った。間伐に適した季節が冬であるため、年度の後半からの活動が多く、まとめたり考えたりする時間を確保することに苦勞した。
- ・樹木の看板の取り付けでは、植物について担任が何も

分からなかった。

- ・森林での様々な活動を行うに当たり、準備の時間の確保が難しかった。
- ・シジュウカラの巣箱がヘビに襲われるというハプニングが起きた。
- ・間伐材の利用方法に困った。

3 課題への対応

工夫したことや課題の解決策など



- ・間伐体験では、岡崎市役所の方やNPO法人の方々に作業内容を教えていただいた。また、実践時には教頭先生に授業に参加していただき、子どもたちに指導をして頂いた。間伐の作業では、各自ヘルメットを準備させて安全に作業ができるように配慮した。本校では3学期に総合的な学習のまとめを発表する行事があるため、その時間に向けて子どもたちが実践して感じたことをまとめて発表した。
- ・樹木の看板の取り付けでは、岡崎市役所環境保全課や専門家の方に木の種類を教わりながら学習を行った。この時の看板は、教頭先生が準備をしてくださった。

- ・活動における準備を、NPO法人の方々、岡崎市役所環境保全課の方々、教頭先生、教務の先生、校務員さんにして頂く部分が多く、そのおかげで活動を行うことができた。

- ・思いもよらないヘビの襲来では、「ヘビは悪い奴なのか」という投げかけをして考える時間をとり、子どもたちが生物多様性について考える契機とした。

- ・間伐材の利用では、本学級の子どもたちが間伐した孟宗竹を飯盒に、他学年が作った竹炭を燃料にして炊飯活動を行った。また、樹木の間伐で出た間伐材で、市内の作品展に出品する人形の作品を制作した。

4 その他

今後の計画や方向、抱負や希望など



- ・愛鳥がシジュウカラでなくとも、必ず自然と深くかかわっていくことができる。そこで、今後は、本年度の子どもたちが行った活動を5年生の活動の基本としながら、継続的に森林を活用した学

習活動を行っていきたい。また、これらの活動をした子どもたちがより広く活動の意義を地域に知らせることで、地域ぐるみで環境保全活動を行っていけるようにしたい。

岡山県
にしあわくらそんりつ
西粟倉村立
にしあわくらしょうがっこう
西粟倉小学校

〔6年〕今西亮太／白旗諒／白旗晃征

森とともに生きる村の ふるさと元気学習



学校紹介

西粟倉小学校は、岡山県の最北東部の西粟倉村にある児童数70人の小学校です。西粟倉村では今“百年の森林”構想をもとに、森林資源を活用した産業や村づくりに取り組んでいます。

小学校では、全校でふるさと元気学習に取り組んでいます。これは、ふるさと西粟倉の自然や人から学び、ふるさとをもっと元気にする学習です。

また、毎日“あいさつタッチ”をがんばっています。あいさつタッチは手と手でタッチしながらあいさつをします。あいさつタッチをすることで、村中、日本中を元気・笑顔・仲良しでいっぱいにすることを目指しています。

活動場所

西粟倉村の最北部に約83ヘクタールの若杉天然林があります。岡山県の三大河川の一つ吉井川に注ぐ、吉野川の源流域をなしています。ブナ、ミズナラ、トチノキなど約200種類の樹木が立ち並んでいます。また、その周辺には、スギやヒノキの人工林があります。これらは西粟倉村の村有林です。

西粟倉小学校は、上記の森林を学校林として活用し“ふるさと元気学習”を村教育委員会や村役場の強力な支援のもとに行っています。



サミットに参加してみて・・・

今後の夢・希望・活動計画

子どもサミットに参加して、北海道をはじめ全国の森でつながる仲間と出会うことができました。

今回の貴重な体験と交流のチャンスを引き続き教育に活かしていくために、全国の仲間と交流し学習する、森のおくりものネットを立ち上げました。

森で体験したり学習したりしているみなさん！学んだことを伝え合い、森でつながる仲間といっしょに学習しませんか。森のおくりものネットへの参加をお待ちしています。



森を元気に 人を笑顔に 森も人も仲良しに



あいさつタッチの村・学校



西粟倉村立西粟倉小学校

6年 今西亮太 白旗 諒 白旗晃征

天然林や人工林で活動



- 春には
 - ・ふるさと元気ウォーキング
 - ・森の元気教室
- 夏には
 - ・沢歩き体験
- 秋には
 - ・源流たんけん
 - ・秋の森のおくりものさがしなどの活動を行っています。



ほくは、モリー
西粟倉小学校の
キャラクターの一人だよ。
ほくは、森を葉っぱで
いっぱいにするよ！



若杉天然林で

たくさんの種類の木がはえていて、葉っぱもいろんな形をしています。地面は、落ち葉でフワフワです。



スギ・ヒノキの人工林で

間伐をしていない森は、とても暗かったです。間伐をしている森は、木も太くて高くて、とても明るいです。何だか森が元気に思えました。

森のおくりものが人と人をつないでいる



水でつながる学習

若杉天然林から流れる水が川になり、瀬戸内海へつづいています。その川の近くにある小学校へ、4年生が手紙を出したことがきっかけで、河口近くの小串小学校と交流が始まりました。

小串小学校の子どもたちが西粟倉村をたずねてきてくれました。森の子と海の子が水でつながり、森や海のことを学習しています。



間伐材で村を元気にする

間伐材で元気グッズをつくり村を元気にする取り組みをしています。グッズは

村の人や観光客の人に配ります。このグッズを持つと、元気、笑顔、仲良しでいっぱいになります。



モリーから 全国のみなさんへ

森や地域で学習したことを交流する“森のおくりものネット”に参加しませんか。くわしくは、西粟倉小学校のホームページをご覧ください。



西粟倉村立西粟倉小学校



I 実践の成果

実践の効果や子どもの成長、今後の期待など

①天然林や人工林と、ともに生きる

西粟倉村の最北部にはブナ、ミズナラ、トチノキなど約200種類の樹木が生える若杉天然林が、その周囲にはスギ・ヒノキの人工林が続く。それらの村有林が西粟倉小学校の学習フィールドである。“春の元気ウォーキング”や“森の元気教室”、秋の“源流たんけん”等の体験活動を行っている。そして若杉天然林では、森が酸素や水をつくること、またたくさんのおくりものを人に与えてくれることを学ぶ。また人工林では、間伐や枝打ちをしていない森と間伐をしている森に実際に入り、その違いを学習している。天然林と人工林を比較し両者の特性を活かした

森と人との関わり方を学習することができた。

②森のおくりものが人と人をつないでいる

若杉天然林から流れる水系の近くの小学校へ4年生が手紙を出したことがきっかけで、河口近くの小学校と交流が続いている。森の子どもと海の子どもが実際に行き来して海や森や水の大切さを学んでいる。また高学年では間伐材を活用したグッズの企画、制作を通して村のものづくりの関係者と関わり、グッズの配布を通して村の高齢者や村を訪れる観光客と交流している。森のおくりものが、多くの人と人をつないでいることを学ぶことができた。

2 実践の課題

苦労したことや困ったことなど



①地域や学校の課題

地域の課題 西粟倉村は岡山県の最北東端に位置し村の面積の9割を山林が占める。昔から森のめぐみを得て暮らしてきた。現在“百年の森林”構想をもとに、間伐材を含む森林資源を有効活用した産業の育成が、村の最重要課題である。

学校の課題 西粟倉小学校は、かねてから村の恵まれた自然環境をいかした特色ある教育の体系化を模索し

てきた。

②意義のある体験活動であっても、単にそれだけでは今の学校教育の中での存続は難しい

教育課程が変わり、特に総合的な学習の時間では教科としてのねらいがより明確に示され、また学校独自にねらいを定めることが要求されている。地域で意義のある体験活動でも、従来通りのねらいでは存続が難しい。

3 課題への対応

工夫したことや課題の解決策など

①地域の特色を生かした体験活動と、今の学校教育でのねらいを達成する学習を融合する

“ふるさと元気学習”の創造 現在、ふるさとの自然や人に学び、ふるさとを元気にする“ふるさと元気学習”の開発に取り組んでいる。具体的には、総合的な学習の時間で、子どもたちに身につけさせたい力として、●ふれあい関わる力●自ら学びつくり出す力●自己を見つめともによりよく生きる力、を学校独自に設定し、これらを人間力とよぶことにした。これらの力を、地域の特色を生かした体験活動を展開する中で、“探究的な学習”(課題設定・情報収集・分析・まとめ表現)を通して身につけさせるカリキュラムを開発している。

○村内の天然林や人工林・渓流などの自然や、地域の人々に関わる体験活動を設定する。

○村教育委員会、村役場関係部署、村内各種団体等と強ちに連携して体験活動を充実させる。

○中・高学年では体験活動をもとに“探究的な学習”を可能にする学習プログラムを開発する。

・全校に関わる活動：春の元気ウォーキング、ふるさと元気給食 ふるさとを感じ、ふるさとを味わう活動

・低学年テーマ「ふるさとたいけん」：五感を鍛える原体験

・中学年テーマ「ふるさとのおくりもの」：森のおくりものを学ぶ活動、水でつながる学習

・高学年テーマ「ふるさとづくり」：“人・出会い・ものづくり”の視点から、ふるさととともにより良く生きる活動

②ゴールは“ふるさとを元気にする”こと

子どもたちは活動を通して、ふるさととともにより良く生きるための工夫を具体化していく。ふるさとづくりに貢献することで、子ども自身の有用感を高めると同時に、ふるさとを元気にしていくことが学習のゴールである。

4 その他

今後の計画や方向、抱負や希望など



①地域を越えて全国規模で、価値観を共有する学校と連携していく

今後の教育を考えると体験的な活動に留まらず、表現・交流する活動までも関連させた教育の重要性が増

している。子どもたちの学習フィールドが地域の森に始まり、価値観を共有する全国の学校との交流まで広がる学習ネットワークづくりの必要性を感じている。



先生もおそろいのカッパTシャツが決まりました！